

透き通った海と青く澄んだ空、そして美しいここ座間味島で、六十七年前の惨劇を私は現実のこととして想像することができなかった。

私の生まれ育った座間味島は、沖縄戦で米軍が上陸した第一歩の地である。そこで繰り広げられた地上戦は、想像を絶するほど醜く悲惨だった。罪のない多くの人々の命が奪われ、平和な日常が音を立てて崩れていく。座間味の沖縄戦の真実を私に教えてくれたのは、戦争体験者である近所のおばあだ。

おばあは当時、中学二年生で開墾や農作業をする毎日だったという。そんな苦勞をしいよいよ卒業式の日、空襲警報が鳴り響く。

「おばあは逃げたよ。少し落ち着いた後、学校に戻ってきたら学校は燃えていて、あっちこっちでみんな死んでたさ……。その中にはいとこもいて、あまりのショックで涙も出なかったよ。」

この話を聞いた時私は、今通う学校や同級生たちの顔が思い浮かび、もし今そんなことが起こったらと想像し、背筋がゾクツとする感覚に襲われた。今目の前で生きて会話をし笑顔でいる仲間が突然命を奪われる：怖い、恐ろしいという言葉では表現できない出来事だと思っ

た。

戦争が激しくなる中、おばあは弟を連れて逃げた。しかし弟は空襲で足に怪我をし、その弟を背中におぶりながら必死に逃げたという。そしてなんとか壕に避難できた。しかし壕の中では赤ん坊が母親のおっぱいの欲しさに泣きじゃくるために、壕にいた人は母親に詰め寄っていた。

「お前の赤ん坊のせいでアメリカ軍に見つかったらどうするんだ！ たった一人のためにた

くさんの人が死ぬことになるんだぞ！ 早くその赤ん坊を、殺せッ！ 殺せッ！」

泣きじゃくるわが子を泣き止ますすべもなく、その母親は汚れたおむつを赤ん坊の口に押し込みながら、声を押して泣いていたという。

何と恐ろしい真実か。人は自分が助かるためなら相手がどうなるうとかまわらない。自分さえ助かればいい。そんな鬼のような心になってしまう人間。そうさせてしまうのが戦争というものなのか。

おばあは、戦争が終わるまでなんとか逃げきり、家族十一名みんな無事だったと語り、やっと笑みをこぼした。

私の祖父は四年前に亡くなったが、祖父も戦争体験者の一人だった。祖父の左手の親指は第一関節を戦時中に銃で撃たれたために短く、指先がなかった。もしあの弾が指ではなく頭や胸に当たっていたら祖父は死んでいただろう。そして私の父も今ここにいる私の命さえもなかっただろう。そう考えると、毎日を大切に生きなければ、と改めて命の重みを感じる。

今現在、私の身の周りでも戦争の恐ろしさを体験することがある。数えきれない程の不発弾の存在だ。座間味の小さな島に隠れるそれは、時々恐ろしい過去を引きずりながら顔を覗かせては、人々を恐怖に陥れる。世界中の人々を魅了してやまない白い砂浜の広がるビーチ

で今なお、不発弾処理は行われる。ものすごい地響きを伴う不発弾処理は、何度耳にしても慣れることはない。しかし戦時中は何千回にも及ぶこの爆音を聞いたのだろう。命を奪われないように、必死で逃げたのだろう。

私たちは、戦争を体験していない。本当の戦争の恐ろしさも分からない。だから今、戦争の真実を知る先輩方に戦争の真の恐ろしさを聞き、たくさんの事を知る必要がある。知ること、二度と戦争をしてはいけない、同じ過ちを犯してはいけないと思えるのだ。おぼあの語る一言一言が、私の心に重くのしかかる。おぼあの語る目が、まるで私の未来を優しく見つめてくれているようにも感じられた。そんな強くて優しい想いを、私はしっかりと受け止めたい。心から素敵だと思える未来をこの手で作っていききたい。そして私を育ててくれた地上戦第一歩の地、この座間味島が、平和の発信地として愛される島となるよう、今ここから平和への想いを発信し続けていきたい。